

## 「国立極地研究所 南極・北極科学館 見学会」報告

事務局 T38 高谷 正紘

令和元年10月15日、甲工東京同窓会13名は、日頃馴染みの薄い「地球・宇宙」関連施設の「国立極地研究所 南極・北極科学館」を訪問しました。

JR 立川駅北口から立川バスに乗り、立川学術プラザで下車、国立極地研究所内に併設されていて、南極、北極の今を知らせる広報展示施設である。

国立極地研究所の特徴は、実際に極地調査で使われた機材が展示されているとともに、南極観測や北極観測の歴史や掘削装置、昭和基地のジオラマ、昭和基地のライブ映像、オーロラ体験等、雪上車（実物）、採取した岩石、生物（剥製）などが展示してあり、南極から持ち帰った隕石や南極の氷を直に触ることができる点です。公式サイトが配信している研究発表も非常に興味深く、日本に落ちた隕石の分析結果なども公開されているため、極地、地質学、宇宙などに興味のある方におすすめです。



展示案内では、神秘の光の謎を探ると銘打ったオーロラのコーナーを始め、シアターを含む9つのコーナーがあり、南極・北極の歴史やこれまでの活動の記録などが見学できるようになっています。

最初のコーナーの「大気・氷ゾーン」では、「液封電動メカニカル型氷床深層ドリル」が展示され、このドリルで得られたアイスコアに閉じ込められていた酸素と窒素の割合や、二酸化炭素などの温室効果気体の濃度を調べることができます。これを使って氷を掘り進めるのですが、結果どんなことが分かるのか？どこまで深く氷を掘れるのか？について詳しく紹介されていました。



アイスコアの長さは、1993～1995年にドームふじ基地で基地・掘削場建設と工事が進み、ドームふじ深層掘削が1995～1996年に2,503m、2006～2007年には何と3,035mに達したとの説明がありました。

南極点到達の雪上車は、KD60型大型雪上車で型名KD604、1967年製（小松製作所製造）です。

昭和43年、第9次南極観測隊の極点往復プロジェクトで昭和基地南極点の往復5,200kmを5ヶ月間の旅程で走破した3台のうちの1台です。一昨年、秋田県にある白瀬南極探検隊記念館のKD605と共に機械遺産に認定されました。



庭に出ると昭和基地で活躍したカラフト犬のブロンズ像があり、奇跡の生還をした、あの南極観測隊第一次越冬隊の「タロとジロ」のことを思い出しました。昔の犬だったせいか、北海道の極寒の環境で生きたせいか、平均寿命は7歳くらいだったそうです。



悲しい事に、1970年代にほぼ絶滅してしまっているそうです。

普段馴染みがない北極や南極でどのような研究や観測が行われているか、どのような生物が住んでいるのかを知ることができるため面白いです。館内には、南極大陸、日本の南極基地「昭和基地」のジオラマや、観測隊が実際に着用している

服も展示されています。また、昭和基地内の観測隊の住居、他にも、実際に観測現場に立ち寄った時に撮影したものなどが展示してあり、南極調査の雰囲気を感じとり科学館をあとにしました。

国文学研究資料館では、開催されていた企画展「本のかたち本のこころ展」の初日で、主として日本古典籍（江戸時代以前に日本で製作された書物を指すとの事）の希少な本、絵入り本、著名な本、雀の夕顔絵巻貼付屏風など貴重な旧蔵書を、学芸員の方がわかりやすく各コーナー別に案内して頂きました。



懇親会は京王クラブに会場を移し、保坂副会長の司会進行により参加者の親交を深め、一同盛り上がり有意義な1日でした。